

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さ
ばかりさかしだち、**真名書き**ちらしてはべるほども、よ
く見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人にこと
ならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末う
たてのみはべれば、**艶**になりぬる人は、**いとすごうすず**
ろなるをりも、ものあはれにすすみ、をかしきことも
見すぐさぬほどに、**おのづから**、**さるまじくあだなるさ**
まにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人のはて、
いかでかはよくはべらむ。

清少納言は、得意げな顔をしてひどい人でございます。あのように利口ぶって漢字を書き散らしておりますが、（彼女の書いた文章を）よく見ると、まだ知識の浅薄なところが多く見受けられます。この（清少納言の）ように、人とは違う自分でありたいと思ひ、そういう方を好む人は、必ず見劣りし、将来が嘆かわしくなっていくだけでございますから、（この清少納言のように）優美な人は、たいそう趣に欠けつまらない時でも、しみじみとした情趣を無理に見出し、風流なことも見過こさないのので、自然と、
（人として）そうあってはならない浮ついた様子になるのでし
う。その浮ついた人の末路が、どうして良いものでありましようか（いや、よいはずはございません）。